

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・安定した居場所事業の運営ができているため、定期的に拠点スタッフ間で事業の目的や利用者への対応を振り返り、利用者の主体性を支援する運営を進めていく。 ・要望に応じて居場所で把握したニーズを区内の子育て支援を行う者に発信していたが、今後は定期的に発信し、広く活用が図られるようにしていく。 ・0歳児から1歳児は過ごしやすいひろば空間が確保できているが、2歳以上の幼児についてはその年齢特性にあった遊びがさらに出来るよう、子どもの視点でひろば空間を工夫していく。	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		A	A
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		B	B
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

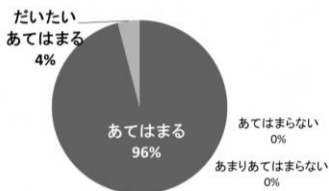
対象別プログラム参加者

項目	H28	H29	H30
気になる子のサロン(組)	80	67	
外国籍親子との交流(組)	6	13	
ふたごサロン(組)	45	56	
プレママデー(人)	23	22	
パパおいデーあそびタイム(父親利用人数)	61	79	

*「気になる子のサロン」H28は定例サロンのほか年1回イベント実施

いっぽ利用者アンケートから

「挨拶と笑顔で親子を温かく迎え入れてくれる」



年齢別プログラム参加者

項目	H28	H29	H30
あかちゃんとのふれあいあそび(組)	225	259	
ひろばde1歳児(組)	160	163	
2~3歳児の遊び場(組)	109	141	

項目	H28	H29	H30
年間利用者数(大人・子ども)(人)	21,020	23,409	
年齢別年間利用者数(人)	0歳児	3,064	3,566
	1歳児	3,581	4,188
	2歳児	1,981	2,445
	3歳児	1,317	1,089
	4~6歳児	1,272	1,203
子ども合計	11,215	12,491	
年間実利用者数(子ども)(人)	1,848	1,855	
年度末累計登録者数(子ども)(人)	5,105	5,004	
年間新規登録者数(子ども)(人)	864	854	

1. 温かい迎え入れを常に心がけ、居心地のよいひろばになるようスタッフが連携をとっている(①)

開所以来「よく来たね、また来てね」をスタッフの基本姿勢とし、利用者を温かく迎え入れることを大切にしている。「いっぽ利用者アンケート」^{注1}では、「スタッフが心優しく声をかけてくれ、来やすい雰囲気がある」「ここに来ると親の私も落ち着く」という声がよせられている。スタッフは日々の振り返りや月1回のミーティングで利用者対応等共有し、連携しながら見守る体制をとっている。また、毎年スタッフ全員で「ガイドライン」等を用いてひろばの意義を確認している。

2. 年齢別のプログラムを行い、継続して利用する人を増やした(①)

年齢別プログラムを設定して継続した利用をうながし、利用者数の増加につながった。日常的な利用者間交流が活発になるよう1歳児向けのプログラムはひろばで実施した。また、利用者同士が声をかけやすくなるよう、名札に年齢別のシールを貼り、交流をうながした。

3. 対象別プログラムを設定し、養育者同士が知り合うきっかけづくりを行った(②)

発達について気になる子とその保護者、外国につながる家族、双子、妊婦、父親が参加しやすい対象別プログラムを設定している。養育者同士が共通の不安や悩みを話し、体験したことや経験を踏まえた情報を共有し、支えあいの関係作りができる場をつくった。

4. ひろばや事業連絡会等の様々な場面で養育者のニーズを把握し、運営に取り入れている(③)

日頃のひろばやプログラムでのニーズの把握に加えて、「事業連絡会」^{注2}を開催し、支援者と利用者が意見を交換する機会を設けている。利用者の「いっぽで昼食がゆっくり食べられない」という声と、支援者からのアドバイスを参考に、拠点での月2回研修室ランチルームの実施につなげた。

5. 子どもが遊びに集中できるよう、ひろばのレイアウトを変更した(④)

ひろばのレイアウトを変更し、子どもが遊びに集中できる空間を作った。ひろばの安全も確保され、すべての年齢の子どもが利用しやすくなった。これにより、幅広い年齢の子が利用するようになり、きょうだいを連れての利用もふえている。利用者同士の交流が活発になった。

注1)「いっぽ利用者アンケート」:平成30年1月~3月に実施。拠点を利用する保護者を対象に調査票によるアンケートを実施。201件回収。

注2)「事業連絡会」:地域の声を反映した事業展開のために、拠点事業報告と、意見交換を行う(年1回開催)。参加者は、連合自治会会長、民生委員児童委員協議会代表、地域ケアプラザ所長会代表、保育園園長会代表、緑区幼稚園協会代表、緑区社会福祉協議会事務局、子育て支援者、拠点利用者(2名)。

様式1-1 地域子育て支援拠点事業評価シート

評価の理由(区)

・居場所事業のプログラムや雰囲気づくりについて、定例会で実施状況や利用者の様子の報告を受けることで課題を共有し、検討する機会を持っている。広場のレイアウト変更等、定例会の時に実際に変更点を把握することで、区職員が拠点を紹介する際など区民への具体的な情報提供に役立っている。

・子ども・家庭支援相談、乳幼児健診、母親(両親)教室、赤ちゃん教室等の事業で拠点の紹介をしている。こどもの発達に不安のある保護者には区の既存事業による支援に加え拠点事業の「気になる子のサロン」を紹介することで、保護者やその子どもに適したプログラムを提案している。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・ひろばのレイアウトの変更や、年齢別のプログラムを設定して、どの年齢の子どもも利用しやすいひろばになるよう工夫した。その結果、0～2歳児の利用者数が増えた。

(課題)

・ひろばが、交流の場であったり、仲間づくりの場であったり、利用者それぞれにあわせた場になるよう、引き続き利用者の声を聞き、ニーズの把握を進めていく。

振り返りの視点

- ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
- イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
- ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
- エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
- オ 把握されたニーズを区こども家庭支援課や関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
- キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気付き、学ぶ機会を提供する場となっているか。
- ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	・スタッフは拠点での相談のあり方や自分の役割を理解し、対応にあたっている。今のスタンスが変わらぬよう、常に確認が必要だと思われる。スタッフ会議に区職員との事例検討を取り入れるなど、全スタッフが役割を定期的に確認する機会を設ける。	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができています。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

項目	H27	H28	H29
相談件数(スタッフ)(件)	804	1,046	1,160
相談件数(専門相談員)(件)	286	302	347
専門相談実施回数(回)	35	36	36

1. スタッフは傾聴の姿勢で相談にあたった(①)
身近な相談相手となれるよう、傾聴の姿勢を常に確認しながら相談対応している。スタッフの相談スキルを保つため、年1回の傾聴研修を継続して行った。
2. ひろばが気軽な相談場所であることの認知度を上げた(①)
利用者支援事業がはじまり、ひろばで横浜子育てパートナーに相談できることを周知している。そのため、ひろばが相談できる場であることへの認識が養育者に広まり、横浜子育てパートナー以外のスタッフにも気軽に相談する人が増えた。
3. 子どもの育ちに不安のある養育者が安心して話ができる場を設けている(①)
「気になる子のサロン」(月1回)は、育ちに不安のある養育者同士が安心して話をしたり、養育者がスタッフに相談できる場となっている。また継続して参加している養育者が、経験者として他の養育者の思いを受け止めている。
4. スタッフ間で振り返りを行いながら、対応姿勢の共有をはかった(①)
ひろば終了後、その日の相談内容について振り返りを行い、必要に応じて翌朝のミーティングで共有している。ひろばで把握した課題については、月1回のひろばミーティングで検討し、課題の解決に努めている。
5. 区と拠点の定例会で利用者への対応方法を協議した(②)
毎月の定例会で、利用者への対応について情報共有し、協議する時間を設けた。

評価の理由(区)

- ・子育て支援関係者向けの児童虐待防止関連の研修について拠点スタッフにも周知を行い、拠点スタッフのスキルアップに役立っている。
- ・よく聞かれる育児の対応方法について定例会で共有することで、拠点スタッフの知識を深め、相談にあたってもらうことができた。

拠点事業としての成果と課題

- (成果)
- ・定例会の中で利用者への対応について確認・検討する時間を確保している。事例を重ねる中で、区と拠点の役割分担を明確にし、連携を図りながら継続した支援を行っている。
- (課題)
- ・拠点内事業間での連携体制を整えながら、利用者それぞれの相談内容に合わせた対応を引き続き行っていく。

振り返りの視点

- ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。
- ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。
- エ 区こども家庭支援課との連携のもと、各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。
- オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、区こども家庭支援課と相談しながら適切に対応しているか。
- カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	・区内の各エリアから定期的に情報が届く状態は定着しつつあるが完全ではないため、今後も各エリアから情報を得られるように働きかけていく。また、各エリアの中で情報共有を活発に行い、それぞれの活動に活かせるように子育て支援を行う者の協力を得ながらを進めていく。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。	・拠点に届く子育て支援に関する研修情報などを伝達する方法が十分ではないため、子育て支援を行う者に向けた研修や、活動に役立つ情報の提供を充実させる。	B	B
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。	・より多くの養育者に情報発信するために、日々の子育てに悩む養育者の声に着目し、ひろばでの声やまたその解決方法等をホームページに掲載し広く発信し、子育てに役立ててもらおう。	B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

項目	H28	H29	H30
ブログ更新回数 *1	54	55	39
ブログ訪問者数(30日間) *2		193	663

*1「ブログ更新回数」H30年度は6/16まで
*2「ブログ訪問者数」 H29年3月 と H30年5月

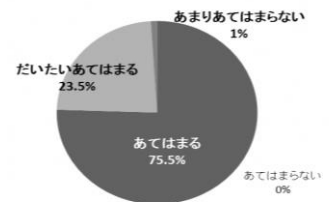
【いっぽ通信】

発行数:2300部/月

配布先:区内全ての公共施設、親と子のつどいの広場、幼稚園、保育園、産婦人科等

いっぽ利用者アンケートから

「子育てに必要な情報が収集しやすい」



1. ネットワークを活用し、区内全域からの情報を収集した(①)

参加する各種連絡会等で拠点への情報提供の協力を依頼し続け、区内の公共施設が定期的に発行している機関誌等はおおむね収集できるようになった。単発のイベント等の持ち込みチラシの数も増加している。親と子のつどいの広場が持つ情報がより地域に密着しているため、親と子のつどいの広場訪問時には新しい情報を収集している。

2. ひろばにあるチラシ等の情報を、手に取りやすくなるよう配置を工夫した(①)

子どもの預け先の情報、外国人向けの情報等、目的別にコーナーを設けた。チラシ類はより手に取りやすいよう玄関やひろばの壁面を活用するなど配置を工夫した。「いっぽ利用者アンケート」では「上の子で利用していた4年前に比べて、地域の情報が得やすくなった」「地域情報がたくさんあるので、いろんなイベントに出かけることができた」との声があった。

3. 地域の支援の場に出向き、情報提供を行った(①)

親と子のつどいの広場(3箇所 合計29回/年)、子育て支援者会場(9箇所 合計9回/年)、赤ちゃん教室(14箇所 合計14回/年)に出向くことで、区内全域で拠点が持つ支援情報を提供できた。

4. 拠点のホームページをリニューアルした(①・②)

拠点を利用していない人にもわかりやすい内容になるよう、構成を検討しリニューアルした。

(1)子育て支援関係者向け情報の掲載:子育て支援関係者向けのページを作成し、拠点や近隣で開催される子育て支援関係者向けの講座等の情報について掲載した。また、拠点が行っている支援内容も紹介し、おもちゃ等の貸出しリストはWEBで確認できるよう工夫した。

(2)区内の施設の訪問記を掲載:地域情報として、区内の子育てサロンや、園庭開放など全49箇所をスタッフが訪問し、利用者目線の訪問記を作成し、掲載した。拠点に来所しなくても情報収集ができるよう、発信している。

5. 利用者が情報発信に参加できる場を提供した(③)

いっぽ通信に「利用者のリレートーク」のコーナーを設け、利用者が情報発信できる場を毎月作った。またひろば内の「情報交換ボード」にテーマを設定して投稿しやすくなるよう工夫した。これにより、利用者同士の口コミ情報の交換が活発になった。

評価の理由(区)

・区や市で把握した子育て支援に関する情報について拠点に情報提供し、拠点の情報発信力を活用した周知を行っている。
・赤ちゃん教室、母親(両親)教室、子ども・家庭支援相談、子育て支援者会場等の区の事業において、拠点がその機能や支援情報について周知する機会を提供するとともに、区でも積極的に拠点を周知している。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・ネットワーク事業を活用して拠点としての情報集約機能を周知した。その結果、区内各施設が発行する刊行物等が定期的に拠点に届くようになり、区内全域の情報を拠点で情報提供することができた。
- ・子育て支援関係者を対象とした情報をホームページに掲載した。

(課題)

- ・各施設や団体による単発のイベント情報などは拠点での情報集約が不十分なものもある。ネットワーク事業を活かして得た情報をもとに開催のタイミングに合わせて拠点から問合せをするなど、積極的な働きかけを行っていく。
- ・利用者が自ら投稿できる場を拠点のひろばに設けている。その場を活用した利用者による情報発信・情報提供が活発になるような働きかけを進めていく。

振り返りの視点

- ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
- イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
- ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
- エ さまざまな子育て支援の場に出向いて収集した具体的な情報や、関係機関及びネットワークを通じて得た情報を養育者や担い手に提供しているか。
- オ 拠点の情報収集・提供機能を幅広く区民に周知しているか。
- カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
- キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。